

恋のライバル関係になる父と息子

—— ゲーテの『五十歳の男』¹⁾ における父子関係と「諦念」について ——

熊谷 哲哉*

はじめに

ゲーテ（1749-1832）は長編小説として、『若きヴェルターの悩み』（1774）、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（1796）、『親和力』（1809）、そして『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代あるいは諦念の人々』（1829）の四作品を残している。なかでも晩年に完成した『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（以下、遍歴時代）は、戯曲『ファウスト第二部』（1832）と並び、執筆期間の長さや形式の横断性（長編、短編小説、詩、書簡、アフォリズムが一つの作品に融合している）、そして内容的な多層性などにおいて際立っている作品といえる²⁾。

ゲーテの小説の大きな特徴として、主人公の行動を中心としたメインストーリーと並行して、主人公の会合する人物たちの物語や、あるいは登場人物によって語られる挿話としての多くのサブストーリーが収録されている点が挙げられる。たとえば最初期の『若きヴェルターの悩み』では、主人公ヴェルターから作中には登場しない友人ヴィルヘルムに宛てた書簡体小説という形式ながら、ヴェルターの目を通して、彼と同じように恋や情熱に突き動かされた結果、自殺や発狂、殺人へと至ってしまう哀れな者たちが描かれる。また、『親和力』にも登場人物たちの人間関係や恋愛模様と並行して屋敷の改築や庭の造成、そして登場人物たちが語る物語が展開される。『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』³⁾ には「美しき魂の告白」、また『遍歴時代』には「聖ヨゼフ2世」、「五十歳の男」、「さまよい歩く気のふれた女」、「新メルジーン」など、表題をつけられた挿話（ノヴェレ）がいくつも収められている。とりわけ『遍歴時代』に収められたそれぞれの挿話は、後述するがいずれも家族や結婚をめぐる人間関係が主題となっている。

本稿では、そのような『遍歴時代』の挿話の中でも、老いを迎えようとする鰥夫の父と若い

* くまがい てつや 近畿大学教授

息子とが恋のライバルになるという奇妙な状況を描いた「五十歳の男 (Der Mann von fünfzig Jahren)」を取り上げ、この作品に描かれた父子関係の意味と『遍歴時代』の副題でもある「諦念の人々 (Die Entsagenden)」という、長編小説全体のテーマがどのように関係しているのかを考察する。

1. 父と子そして二組のカップル

はじめに『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』という作品の全体像とともに、「五十歳の男」の概要を確認しておきたい。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』は、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』と同様、ヴィルヘルム・マイスターを中心として、彼の成長と遍歴、そして恋愛と家族、さまざまな人々との出会いが描かれる。先行作品の『修行時代』では、商人の息子ヴィルヘルムが家業のための修行として家を出るが、演劇の道に進むため、旅回り的一座と行動をともにし、途中で知り合ったロターリオの招きで秘密結社「塔の結社」に入ったのち、修行を終えてロターリオの妹ナターリエと結婚し、かつての恋人マリアンネとの間にできた息子フェーリクスとともに新たな旅に出るまでが描かれる。続編である『遍歴時代』では、塔の結社から命を受けてヴィルヘルムとフェーリクスが、ナターリエの元を離れて旅をする。フェーリクスは教育州でかつての仲間ヤルノー（モンターンと名乗っている）などに導かれ、ふたりの間を揺れ動く女性ヒラーリエ、そしてその叔母で本作を動かす影の原動力となっている不思議な女性マカーリエらとの出会い、かつての仲間であるロターリオの新大陸への移住などを経て、最終的にはヴィルヘルムが外科医となるまでが描かれる。

第二巻第三章から第五章にあたるのが、本作「五十歳の男」である。五十歳を迎える富裕な貴族の少佐（名前は書かれず、Major という職名でのみ呼ばれる）は、妹である男爵夫人（この人物も名前は出てこない）のもとを訪れ、かねてから進めていた自分たちの子供への財産分与がうまく進みそうなことを伝え、そして少佐の息子フラヴィオと男爵夫人の娘ヒラーリエの結婚も一族の繁栄のために進めていこうと話す。しかし男爵夫人はヒラーリエには心に決めた人物いて、それは他でもない少佐のことだと伝える。姪が自分に好意を持っていることを急に告げられて少佐は動揺するが、かわいらしいヒラーリエの姿を目にして、彼女の思いを受け入れようと、彼よりもさらに年長であるのに若々しさを保っている友人の俳優に相談し、若返りの術の指南を受けたのち、俳優から一人の従僕を借りて髪や肌を美しく整え始める。いっぽう少佐の息子フラヴィオの様子を見に行くと、彼にもまた親たちの意図とは別の相手がいることがわかる。年上の美しい未亡人（彼女もまた匿名である）に恋をしたフラヴィオは、少佐を彼女の元へと連れていく。美しい未亡人に歓待を受けた少佐は息子の恋愛相手を認め、自らも若い恋人ヒラーリエとの結婚へ前向きになっていく。しかしあるときフラヴィオが髪を振り乱して

実家へとやってきて、未亡人から拒絶されてしまったことを伝える。心身ともに疲弊していたフラヴィオは男爵夫人とヒラーリエのもとで介抱され、徐々に生氣を取り戻す。療養中にベッドの中で詩を書いたフラヴィオにたいしてヒラーリエは返答の詩を書く。このやりとりを通じて若い二人の間に新たな結びつきが生まれていく。少佐が領地を離れている間に、長雨のため領地には洪水が起こり、フラヴィオとヒラーリエは小舟を出して村の人々の間を周り、さらに溢れた水が冬の寒さで凍りつく、ふたりはスケート靴を取り出し手を取り合ってスケートを楽しむ。久しぶりに領地に戻った少佐は、自分の前歯が一本抜け落ち、もう一本もそろそろ抜けそうになっていることに気づく。そしていつのまにか仲睦まじくなっていたフラヴィオとヒラーリエを見て、もはや彼女の気持ちが自分から離れてしまったことに絶望するが、あるとき美しい未亡人から手紙で呼び出され、彼女が男爵夫人とマカーリエからの手紙を読んだことがきっかけで、フラヴィオから身を引いたことを知る。ここで物語は中断され、この四人がどうなったのかは明らかにされないが、続く章でヒラーリエと美しい未亡人がヴィルヘルムとともにイタリアへ旅立ち、『修行時代』で亡くなったミニヨンの足跡を辿ったこと、そして終盤近くに、ヒラーリエとフラヴィオが結ばれ、少佐もまた美しい未亡人とともに過ごしていることが伝えられる。

先述したように『遍歴時代』には他にも家族や結婚を扱った挿話が含まれている。これらも「五十歳の男」とよく似た構造を持っているので合わせてまとめておく。「裏切り者は誰か」（第一巻第八～九章）では、大学教授の息子ルチドールと彼が世話になった長官の娘ユーリエとルチンデ、そして初老の男アントーニを含めた四人の男女における結婚相手選びが描かれる。ルチドールは周囲からユーリエとの結婚を期待されたものの、本心を明かしたのち娘たちの助力でルチンデと結ばれる。「さまよい歩く気のふれた女」（第一巻第五章）では、富裕な中年男性ルヴァンヌ氏が、舞踏会に行くような服装で街道を歩く謎の女を保護し屋敷に住まわせるが、ルヴァンヌ氏と彼の息子が彼女に恋をしてしまい、父子がライバル関係となる。気のふれた女は両者から求婚されるが、息子には父との子を妊娠していると嘘をつき、屋敷から姿を消す。これらの挿話は、もちろん『遍歴時代』の本編におけるヴィルヘルムとフェーリクス父子関係、そして二人の間にいる（ヴィルヘルムに惹かれながらもフェーリクスから好意を向けられる）ヘルジーリエとの関係を写したものとなっている。

「五十歳の男」を読んでみるといくつかの疑問点や奇妙な点が見つかる。なぜヒラーリエは幼少期から仲が良く、親同士が認める間柄だったはずのフラヴィオではなく、五十歳でしかも伯父である少佐に恋をするのか。そしてなぜ少佐は、ヒラーリエの恋を思いとどまらせようとするのではなく、若返りの術を使ってまで好意に応えようとするのか。物語の中盤で、美しい未亡人から拒絶されたフラヴィオはなぜヒラーリエに惹かれるようになるのか。登場人物四人における心変わりの動機は何か。そして最後に少佐は若返り術を止めて老いを受け入れ、

最終場面近くで美しい未亡人と結ばれたことが報告されるが、この少佐における「諦念」とはどのようなものと考えられるだろうか。ほかにも多くの論点が見出せるだろうが、まずはこれらの問いについて考えてみたい。

2. ゲーテ作品に描かれた近親者間恋愛のモチーフと同時代の言説

はじめに「五十歳の男」における奇妙な点の一つとして、近親者間のそして年の離れた相手との恋愛がなぜ描かれたのかについて、ゲーテの他の作品との比較、そして同時代における近親者間での恋愛がどのように扱われていたのかを探る。

「五十歳の男」では少佐に、その姪である男爵夫人の娘ヒラーリエが恋をすることが物語の発端となっているが、他にもゲーテ作品ではしばしば近い親族間や兄妹感での恋愛（あるいは擬似的な恋愛）が描かれている。初期の戯曲『兄妹』（1776）では、主人公のヴィルヘルムの妹マリアンネは、実は早世したかつての恋人シャルロッテの娘であり、ヴィルヘルムは兄妹でないことを彼女に伝え、最終的に両者が男女として相手を思い合うという結末になる。また『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』において、ヴィルヘルムと行動をともにするサーカス団から身請けされた少女ミニオンは、豎琴弾きの老人アウグスティーンが実の妹とは知らずに愛し合っていたスペラータとの間にできた子どもだったことが語られる。他にも『タウリス島のイフィゲーニエ』における姉イフィゲーニエと弟オレスト、『クラヴィーゴ』における兄ボーマルシェと妹マリーなど、疑似恋愛的に強く結びついた兄妹・姉弟関係はしばしば描かれている⁴⁾。

また、年の差が離れた男女の恋愛も、しばしばゲーテ作品に登場する主題である。『ファウスト第一部』では、メフィストフェレスによって若返りを施された老学者ファウストが町娘グレートヒェンと恋仲になることが悲劇の元凶として描かれている。同様に『親和力』でも 40 代くらいの主人公エドゥアルトと 10 代の少女（エドゥアルトの妻シャルロッテの姪）オティーリエとの不倫の恋が描かれる。作品と作者本人を安易に重ねるべきではないかもしれないが、ゲーテ自身もまた 20 歳近く年の離れた父母の子であったこと、そしてゲーテ本人も長年内縁関係であったクリスティアーネ・ヴルピウスとは 16 歳離れていたことから、年の差のある男女関係というのは彼自身にとってさほど特殊なこととは考えられていなかったのだろう⁵⁾。

Koschorke (1999) は、ゲーテが「五十歳の男」を書くにあたって、アウグスト・フォン・コツェブーの『四十歳の男 (Der Mann von vierzig Jahren)』(1794) という同時代の戯曲を参考にしていたことを指摘している⁶⁾。コツェブーの作品では、義父と暮らす娘が若い貴族から求婚されたことをきっかけに三人の男たちのなかから相手を選ぶことになる。その結果、娘は血のつながりのない父と結ばれて終わる。Koschorke が指摘しているように、ゲーテとコツェブー

の両作品には「同族内結婚志向」という共通点があるが、二つの作品ではまた近親結婚は結果として避けられていることも分かる。

しかし第一にこれらの作品は「本物の」父と娘の結びつきからのフィクショナルな逸脱であるが、その近親相姦的な背景が透けて見えることは変わらない。そして第二に当時の法によれば両者の関係は、禁止されないとしても議論の余地が残るものとされていた。⁷⁾

Koschorke はこれに続けて 1800 年ごろに法の刷新が図られたが、それまでは養育のために引き取られた子どもとの結婚は、実子との婚姻と同じように認められなかったし、甥や姪との婚姻もまた非合法とされていたと述べている。しかしこの時代にはゲーテだけでなく、シュトルム・ウント・ドラング期からロマン派の作品（ルートヴィヒ・ティークの『金髪のエックベルト』などがとりわけ有名である）などでもしばしば近親者における恋愛が物語の題材とされていたことはよく知られている。

Titzmann (1991) はゲーテ時代 (1770 年代から 1830 年ごろ) における近親相姦を扱った文学作品に着目し、背景にある法的な変化、家族と愛をめぐる思想的な状況、そして 487 もの文学作品に描かれた近親相姦（分かった上でのことか否か、そして本当にそれが行われたか否か）のパターンを整理した上でこの時代に生じた変化の意味を論じている⁸⁾。Titzmann の論旨は以下のようにまとめられる。すなわち、18 世紀末には啓蒙主義の影響で法の考え方に、神学的規範を根拠にするのではなく、合理的な規範を根拠とする方向へと転換が起こり、そのために近親相姦として処罰の対象となる範囲が従来よりも限定されるようになる。そして家族や愛、友情関係の意味が社会的・機能的なものから、個人的・感情的なものへと変容してゆく中で、家族と友あるいは家族と恋人との線引きはより困難になってゆく。さらに教養主義の理念を背景とした個人としての自立という目標に向かうため、家族から自らを切り離す必要が生じる。結論として、近親相姦とは、従来の規範意識を離れた愛の対象選択においてたまたま自らの一番近くにいた近親者を相手として選んでしまったものの、そのために家族から離れた個人の自立が達成できなくなってしまうというダブルバインド的状况を描き出すために、ゲーテ時代にはしばしば文学作品の主題となったというのである。

3. 登場人物たちにおける心情の変化とその要因

前節では物語の背景として 18 世紀から 19 世紀への転換期に家族や愛情の意味が変化し、それにもなって近親相姦的な主題が流行してきたことを確認した。このことは一般的な傾向としては理解できるが、「五十歳の男」の登場人物においても同じように当てはまるのだろうか。

少佐にせよ、ヒラーリエにせよ、感情の赴くままに行き当たりばつり的に行動しているように描かれており、苦悩する近代的な個人像として理解するのは無理があるのではないだろうか。また、本作において大きなポイントになるのは、登場人物たちにおける愛の対象の変化である。

『親和力』でも主人公エドゥアルトとシャルロッテの夫婦が、友人の大尉と姪のオッティエリエを屋敷へ招いて共同生活を送るうちに、エドゥアルトとオッティエリエ、シャルロッテと大尉という新たな結びつきが生まれているが、「五十歳の男」においても登場人物たちの恋心とその対象の転換が、物語を動かす軸となっている。そして愛の対象の選択には、明確な理由があり、また Koschorke が指摘するように何かを動機として感情が動く、いわば「媒介された欲望 (mediated desire)」⁹⁾ によって四人の関係が成立していることがわかる。以下、Koschorke の論を参考に、少佐、ヒラーリエ、フラヴィオ、美しい未亡人の四人がどのようなきっかけでそれぞれの対象を選び、また変更しているのかを確認する。

まず少佐だが、少佐は男爵夫人からヒラーリエの恋の相手が自分であると伝えられて、狼狽するものの、すぐにこれを心地よいものと受け入れ、彼女とともに庭を眺め、「多くの老木が緑に覆われているのを見て、自分の春もまた帰ってきたのだと信じた」(MA, 400) のだった。ここで少佐は全く躊躇なくヒラーリエの気持ちに答えているように見えるが、少し以前の箇所に見えたと、このように書かれている。

少佐は自分がこの美しい娘をほんの少し前とは違った目で見ていると思った。まるで、これほど美しい心に自分の像を刻みつけることができたその幸福な男にほとんど嫉妬しているかのようだった。(MA, 399)

この嫉妬心、そしてそれを自覚したことが、自らを彼女に愛される幸福な男になりたい、すなわち彼女の愛を受け入れようという少佐の行動の要因となっている。

では、ヒラーリエが少佐を愛する理由は何か。これについては彼女自身というより、彼女が母である男爵夫人の願望に同一化していることが分かる。ヒラーリエの好意を伝えられた少佐は「あの子の自然な性質のなかに、そんな不自然なところがあったまるものか」(MA, 400) と男爵夫人に問いたすが、彼女は「それほど不自然なものではないでしょう」、「私が若い頃を思い出すと、あなたよりももっと年上の人に熱中していたものよ」(Ebd) と答えて、五十歳の兄はまだ若い娘に好かれるような若さを持っていることを強調する。そしてこの「年上の男性への好意」とは、男爵夫人においては自身の兄である少佐への愛着だったことが分かる。

男爵夫人は彼女の兄を若い頃からどんな男性よりも愛していた。そしておそらくヒラーリエの愛情さえも母親の愛着から生じてきたとは言えないにせよ、たしかにそれによって育

まれてきたものだったのだ。いまや三人はみな一緒になって一つの愛、一つの快さに結びついて、そしてそこには最も幸福な時間が流れていたのである。（MA, 411）

男爵夫人の兄への愛着は、娘ヒラーリエへと受け継がれ、そして同一化した二人によって少佐は愛されることになる。

そしてフラヴィオがヒラーリエへと心変わりする要因は何か。第五章冒頭で、フラヴィオは美しい未亡人に別れを告げられ、半狂乱になりながら男爵夫人の屋敷へ駆け込んできく。半ば無意識、半ば正気の状態のフラヴィオは「復讐の女神に取り憑かれたオレスト」（MA, 434）のようだと形容される。その後瀉血を受け、男爵夫人やヒラーリエに介抱されるなかで心の平安を取り戻してゆく。フラヴィオがヒラーリエへと心変わりするきっかけは明示されていないが、Koschorke は二人が詩のやり取りをしている場面で、フラヴィオが読んだ詩はあきらかに美しい未亡人へと宛てたものであり、それに応えるヒラーリエは「彼の初めの恋人になり変わるようになるため、愛情もまた彼女へと転移することができた」¹⁰⁾ と指摘している。詩を送り合うことによって気持ちが通じ合うというのは、フラヴィオが失恋する直前の場面で、少佐と未亡人との間で詩のやり取りが行われたこと（これが二人が結ばれる結末への伏線となっている）と対になっていることがわかる。また、Landfester（2005）は、『遍歴時代』で繰り返される流血／瀉血のモチーフ¹¹⁾に着目し、二人が詩作する場面を、血と詩の交換として説明している。瀉血によって失われる自らの血を、「それは自分のものではない、それは全部彼女（未亡人）のものなのに」と嘆くフラヴィオのために、詩作を促し（さらなる瀉血）、彼の恋人に代わって返答する（瀉血による沈静化）ことで、彼の荒れ狂う情熱は落ち着き、二人は結婚へと向かうことになるというのだ¹²⁾。二人が詩を読み合う場面を瀉血への応答、そして精神的な意味での治療の実践として捉えている点は興味深い。

ヒラーリエが少佐からフラヴィオへと心変わりする場面は、フラヴィオが男爵夫人の家で療養生活を送る中で、彼から「愛する妹よ」（MA, 435）と呼ばけられ、そして自分の服が使い物にならなかったため、屋敷に保管してあった少佐の服を着て現れる場面で彼女の感情は大きく動く。

男爵夫人は微笑んで、しかし自制した。ヒラーリエは、自分でもよくわからなかったが、狼狽してすぐに顔をそむけてしまった。そしてこの瞬間にこの若い男からは心のこもった言葉も一応の決まり文句もうまく出てこなかったのだ。（…）

しかしこうしたたわいのないことによって、人々はその瞬間に潜んでいた気まずい瞬間をやり過ごすことができた。ただしヒラーリエにとっては若い時の父の像と生き生きと現前している息子の姿とがあまりに似過ぎていて、不気味でもあり、それどころか胸を締め

付けられるほどであった。(MA, 438)

すなわち、少佐と同じ服に身を包んだフラヴィオが現れ、自分が好意を寄せる伯父とよく似た、しかしよりいっそう生き生きとした従兄弟の姿にヒラーリエは心奪われることになる。そしてこの感情の動きを後押ししているのが、フラヴィオとの詩のやり取りであり、彼から恋の苦しみを打ち明けられるという状況でもあった。

女性というものは、他の人物を情熱的に愛している人を見ると、好んで相談相手の役をやりたがるものである。彼女の胸には密かに、ほとんど意識しないような感情、崇拜される相手の立場に自らが引き上げられることは不愉快でないはずだという感情を抱くのである。(Ebd.)

ヒラーリエはフラヴィオを支える立場を引き受けるうちに、彼の崇拜の対象である未亡人へと自らの立場を移し替えて、彼の詩に答え、彼の愛情の対象となっていくのだ。

このように物語の後半から、ヒラーリエはフラヴィオと接近するようになり、少佐が不在の間に、二人は領地で起こった水害とその復旧活動に取り組むうちに関係を深める。戻ってきた少佐は仲睦まじい二人を見て息子こそが恋のライバルとなったことに動揺するが、男爵夫人と話し合い、もともとの計画通りにことが進んでいることを受け入れようとする。ここでも感情の動きを表現する媒体が一つ現れる。それは少佐の身体、つまり抜け落ちる歯である。

少佐は自分より十歳も年上でありながら若さを保っている俳優に若返り術の指南を受け、彼の元から一人の従僕を借りて施術を受け、「ミイラのように」香油を塗られたくられて布に包まれて眠ることでこれまでの老いた身体から若々しい肉体へとある種の生まれ変わりを経験する。しかし物語の途中から、すでに少佐は薬品や施術を必要とする若返り術に頼ることはなくなり、早く起きて馬で遠乗りや狩猟をしたり、歩いて領地を巡視したりすることで節度のある生活ができるようになり、またヒラーリエのことを思い浮かべて生き生きと暮らしていた。しかし久しぶりに再会した若い婚約者、そしてライバルとなった息子の姿を見た少佐は、老いの進んだ自らの身体を受け入れざるを得なくなる。

最近、少佐の前歯の一本が抜け落ち、二本目も抜けそうだと恐れたのだった。人工的な見せかけの修復をすることなど、彼の信条にとっては考えられないことだし、こんな歯抜けで若い恋人に求婚することなど、まったく屈辱的なことのように彼には思えてきた。特に今は、彼女と同じ屋根の下にいるのだからなおさらだった。(中略) まるで、彼の有機的存在の要石 (Schlussstein) が抜き取られてしまい、残りのアーチがつぎつぎと崩落しか

かっているかのようなだった。(MA, 448)

歯が抜けて、要石が抜きとられた石造のアーチのように、少佐の体は力を失っていく。この老いの実感によって、少佐はヒラーリエとの結婚を諦め、老人として新たな生へと向かっていくことになるが、それも簡単には進まない。ヒラーリエはフラヴィオと接近しつつも、男爵夫人から結婚を勧められると断固として拒否する。そして少佐もまた煩悶し、なかなかヒラーリエとの結婚を断念することもできないし、いっぽうで少佐との結婚に固執するヒラーリエを拒絶しなければならないとも考えている。

男爵夫人は毎日娘の心変わりを待っていたが、それは空しく終わった。ヒラーリエは控えめだが、減多にないが決定的な機会に自らの確信に断固とした態度で、自らの確信を守り抜くことを示した。まさに、何かが内面的に真実となった者だけが持ちうるほど強固に、たとえそれが周囲の世界と調和しようとそうでなかろうとも。少佐の気持ちは分裂していた。ヒラーリエが本当に息子を相手と決めたら、彼はいつまでも傷つけられたと感じただろうし、彼女が自分に決めれば、そのときは彼女の申し出を断らなければならないと同じように確信していた。(MA, 451)

ヒラーリエとフラヴィオの結婚、そして少佐は息子に相手を譲り自らは身をひく、という自然な解決法へそのまま向かえば良いはずなのに、二人の人物たちは、自らの過去の心情に固執しているようにも見える。ヒラーリエの断固とした確信も、少佐の煩悶も、その根拠となるのは、両者が物語の前半で愛を誓う場面である。

「君は私をこの世で一番幸福な人間にしてくれるね！」少佐は叫んで彼女の足元にひざまずいた。「私のものになってくれるかい？」「お願いですから、お立ちになって！私は永遠にあなたのものです。」(MA, 411)

Schlafler (1980) は、「オッティーリエとヒラーリエはミニヨンを解釈する二つの可能性である。似通っている外面的なモチーフとして、年上の男への愛、オッティーリエとヒラーリエがそこから自発的に引き出してしまう過ち、自らに対して課す贖罪、部屋への引きこもりといった点がある」¹³⁾と指摘している。いうまでもなく「五十歳の男」は『親和力』と同じ構造を持っている。もともと『親和力』が『遍歴時代』の一挿話として書き始められたという経緯を想起すればそれは当然のこととも言える。そこから献身的な愛を体現し、悲劇的な死へと至るオッティーリエと同様にヒラーリエが自らの立てた誓いに束縛される人物であることも理解

できよう。

いっぽうで、実の息子とのライバル関係のなかで煩悶する少佐だが、彼の気持ちを変えたのは、見覚えのない字で書かれた手紙、すなわち息子の元恋人であった未亡人から届いた手紙であった。少佐は手紙の指示通り、指定された待ち合わせ場所に出向き、そこで未亡人と会う。彼女から男爵夫人からマカーリエへと送られた手紙、そしてマカーリエからの返答を読んだことで自分は身を引いたのだと伝えられる¹⁴⁾。ここで未亡人は少佐に向けてこう語る。

「私は不幸ではなかったのですが、落ち着いていませんでした」と彼女は続けた。「私はもう自分自身がまったく自分のものではなくなってしまったようでした。それは結局幸福ではなかったということです。私はもう自分のことが好きになれなかったし、鏡の前でどれほど身なりを整えても、仮面舞踏会に出かけるために着飾っているようにしか見えませんでした。でもあの人が私に鏡をつきつけて下さって、いかに人間が内面から磨き上げることができるかということに気づいてから、私は自分というものがなかなか美しいと思えるようになりました」彼女はそう言いながら笑っているようでも泣いているようでもあった。そして認めざるを得ないことに、彼女はこれ以上なく愛らしかった。彼女は立派で、永遠の忠誠を捧げるに相応しい人物に見えた。(MA, 454)

美しい未亡人が自らのこれまでの振り返り、外面（仮象）にばかり囚われていたが、フラヴィオからの愛によって内面（本質）を再確認するようになったと語るが、このときの彼女の様子が少佐に感銘を与え、彼自身の価値観の転換（そして未亡人と新たな結びつきを得るという結末）を後押ししているものと考えられる¹⁵⁾。

以上のように、少佐、ヒラーリエ、フラヴィオ、未亡人の4名がどのように愛の対象を変えることになったのか、そのきっかけとなる出来事そして感情の変化を媒介するもの（嫉妬心、母の願望、詩、衣服、歯、手紙）を追跡してきた。物語の進行に伴って愛の対象が変化し、そして未亡人や老いを受け入れた少佐も同様に、自らの価値観を変化させてゆく。ここでもう一つ問題となるのが、「諦念（Entsagung）」というキーワードである。ゲーテが『遍歴時代』の副題として「あるいは諦念の人々（oder Entsagenden）」と入れたように、そして物語の中で幾度も諦念が話題になっているように、この概念は重要なキーワードというより、本作の登場人物たちの目標として設定されている。次に、少佐の行動に着目して、「五十歳の男」における諦念の意味についてまとめる。

4. 父子関係と諦念の問題

「五十歳の男」は、他のノヴェレ「さまよい歩く気のふれた女」や「裏切り者は誰か」、「新メルジーネ」などと同様に『遍歴時代』に並行する物語であり、何らかの形で『遍歴時代』の本編で展開されている物語と似たような人物像や似たような筋書きを持っていることははじめに確認した通りである。では、少佐とフラヴィオの親子関係は、ヴィルヘルムとフェーリクスの親子関係と同様であるといえるのだろうか。この点については、やはりある程度近い部分（父と息子とが同じ女性をめぐる三角関係になる点など）はあるが、別のものと言わざるを得ない。ヴィルヘルムは父として、フェーリクスに何かを教え、直接的に導く父ではないが、フェーリクスを教育機関である「教育州」に送り、また最終場面で息子に身につけた医術を活かして瀉血治療を施すなど、家父長的な父親像ではないにせよ、息子を守る父として振舞っていることがわかる。それと比較すると、少佐は、男爵夫人とともに、兄である宮内長官もっている領地を自分たち兄妹で管理し、さらに子供たちへと受け継ぐためにあれこれ手を尽くしているが、一方で息子フラヴィオに対して何か働きかけるような父親ではない。

では次に諦念（Entsagung）についても見てみよう。Wilpert（1998）の『ゲーテ事典』には「より高次のもの、すなわち永遠なるもの、必然的なもの、法則的なもののために到達可能な何かを断念（Verzicht）し、自己を克服する（Selbstüberwindung）というゲーテの倫理思想における根本的な概念」¹⁶⁾と説明されている。「五十歳の男」においては、若い花嫁を諦めて老いを受け入れる少佐だけでなく、愛の対象をあきらめたヒラーリエ、フラヴィオ、未亡人もまた何らかの諦念にいたる体験をした人物ということが出来るが、ここでは少佐において諦念とはどのように生じたものなのか、そしてどのような意味を持っているのかという点に絞って考えたい。

この物語に描かれた四人の男女の恋愛は、最後の場面でわずかにほのめかされるにすぎないが、若者どうし、年をとった者どうしが結ばれるという予定調和的な結末となっている。このようなある意味で「自然な」解決を受け入れることが「諦念」ということなのだろうか。この点について Herwig（1997）は疑問を呈している。最終場面で四名の動向が伝えられるというのは、1829年の最終稿で付け加えられる部分であり、それがゲーテのたどり着いた諦念ではないというのだ¹⁷⁾。たしかに、登場人物たちの年齢が不釣り合いであることを問題にしているのは本稿注14で言及したように、四人の当事者たちではなく、妹の男爵夫人だけである。二組の男女が結ばれるという結末はいずれにせよ多くの読者にとって唐突で違和感を残すものとなる¹⁸⁾。

山本（2020）は、「五十歳の男」の成立過程を初稿と決定稿の異同を追いながら、少佐の老いをこのように評価している。

「年をとった若者」と呼ばれる俳優がいつまでも同じ役柄を演じ続けるのに対して、少佐の老いは、「初恋の男から優しい父親へ」という他者との関係において新しい役割を受けもつ行動として主題化され、彼の「意思と自覚」を描ききることで「老いの物語」が成立したといえることができる。¹⁹⁾

たしかに少佐は俳優のようにつねに身体的美しさに気を配り、若返り術を続けていくという生き方を放棄し、老いた父として新たな生き方を選んでいる。それを諦念として積極的に評価するという観点も理解できる。いっぽうで少佐においては、Wilpert が定義するような「何かを断念し、自己を克服する」ような行動はあったのかは疑問である。前節で登場人物たちの行動と心情の変化を追跡したが、ここで見えてくるのは少佐がたしかに若返り術の実践や、その後の生活習慣の変化で見た目は変化してゆくものの、それほど自ら積極的に何かを得るために行動しているわけではないという点である。少佐は男爵夫人の言葉によってヒラーリエからの好意を知り、彼女の恋人になる幸福な男への嫉妬心から自らの愛欲が生まれる。老いた姿を実感した上で若い恋人に似つかわしいように若返りに励むが、領地を離れて仕事をしているうちに、ヒラーリエとフラーヴィオが接近する。そして妹の男爵夫人がせっせと人生の案内役であるマカーリエへと手紙を送ってフラーヴィオと未亡人の仲を割くよう進めていたのに、少佐は新たな恋人を得た息子に対して何もうつ手がなく、抜ける歯とともに、老いてゆく運命を受け入れるしかない。そして未亡人からの手紙に導かれて、彼女の仮象から内面へという変化に触れる。ここで物語は中断し、少佐の行動を追うことはできないが、最後に未亡人と結ばれたということは、この内面の美しさを見せた未亡人へと引き寄せられたのだと考えられよう。このように少佐の行動を確認すればわかるように、少佐は自ら動くというより、周囲の状況に動かされ、動かされた状況に順応しているにすぎない。そしてその最終的な順応の結果が、優しい父への移行となるわけである。何かを断念 (Verzicht) し、自己克服 (Selbstüberwindung) するという積極的な行動をしているのは、むしろより劇的なフラーヴィオやヒラーリエ、そして明確に自らの変化を自覚する未亡人のほうではないかとすら言える。

この、変化するが自発的に動いているわけではない老父としての少佐をどう考えればよいのだろうか。Herwig は老父が、ヒラーリエの若々しい恋人としてのあり方を諦めたものの、他のゲーテの自己愛的な主人公と異なり、自らの変化を受け入れている点を評価している。

ゲーテのナルシシストたちは自ら変化することを拒む。彼らは年をとっても子供っぽさにとどまる。それは自己愛的な病気から年齢を重ねることすらできなかったヴェルター、『親和力』のエドゥアルト、そして年老いてなお若者ぶった人物として描かれる少佐の「演劇をしている友」が該当する。彼らに対して少佐は、幾度もの役割の変化を体験する

が、そこで老いの一部として若返りを残すことができたのだ。²⁰⁾

最後の文で述べられている、「老いの一部としての若返り」とはもちろん、未亡人との新たな恋というエロスの欲望を意味する。ゲーテがさまざまな作品の中で、多くの似たような自己愛的な主人公を描いたこと、そして彼らがいつまでも若者のままであろうとしたことと、少佐が自ら望んだことではないにせよ、老いのなかに若さを止めることができるような変化を受け入れたという指摘は重要である。

また Herwig は第五章冒頭で半狂乱になって疲弊するフラヴィオが「オレスト」に例えられていることから、この作品に潜む神話モチーフを解説し、このように結論づけている。

息子に殺されたオデュッセウスとは対照的に、ゲーテの父親像は、魅惑的に美しい女性の傍で繰り返される青春の夢を、いきいきとしたまま見続けることが許されている。神話的な原型という背景からゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』小説の一部をなすノヴェレは、仮象から実在への諦念的回帰を弁護するものではなく、あらゆる年齢の生命力を持った可能性とあらゆる非ナルシス的なパートナー関係の擁護であるといえる。（強調は現著者）²¹⁾

オイディプス的な構造を持ちながら、息子と競合する父は殺されることなく、息子の代わりに父は相応しい年齢の恋人を得る。歯は抜けるし、それを義歯でごまかそうともしないが、新たな恋を続けることはできるというわけだ。そして従来の教訓的な解釈を批判し、少佐においては若い恋人を得ようとする青春への回帰の断念を認めるのではなく、若さの対局としての老いではなく、別のあり方としての諦念なのだ述べている。

若くはないが老人らしく振る舞うことが正解というわけではない、となれば、ここで目指されている諦念とは何を指すのか。Koschorke はこの作品を通底しているモチーフとして充足と断念の二重化があるとしている。

充足と断念（Erfüllung und Verzicht）はほとんど気づかないほど自然に移行していった。一方ではそれが完全に幸福な巡り合わせに見えるが、他方ではある種の異質な、満たされない配列と受け取られた。『遍歴時代』はそもそものはじめからこの二重性のもとに置かれていた。そのため感情的な出来事はもはや、閉じた時系列の中で語られるものであることをやめる。それがはらむ危機的な可能性は、それらの出来事を実質的な終末へと追いやることはない。その終末はすなわちカタルシス効果をもはや発揮しない。「解決は時間だけに委ねられるべきだ」と「五十歳の男」のための図式に書かれている。またゲーテは別の

メモには「発展への希望は延期することによる」と書き留めている。²²⁾

ここでもまた、充足と断念の二重性という形で、ただ断念することが諦念というわけではなく、結末を延期しながら待つことの持つ意味が強調されている。これらの解釈から、少佐における諦念とは、若さや青春の断念ではなく、第五章でヒラーリエを諦めるかどうか煩悶していたような、苦悩や結末にあるように未亡人への新たな恋を始めるように、自発的に運命を切り拓いたわけではなく、周囲の状況に引きよせられて、動かされた結果であるにしても、その結果を受け入れる態度であるとまとめることができよう。

お わ り に

本稿では、以上のように『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』において大きな意味を持つ挿話「五十歳の男」を解説した。息子が結婚するはずだった姪から好意を寄せられて、彼女と結婚するために若作りをする、というある種異様な主人公が描かれる物語であることに現代の読者は少なからず違和感を覚える。しかしこのような近親者間での恋愛というモチーフが、ゲーテが活躍した時代に法律や家族観が大きく変化したことを受けて生じ、近代的家族と自由恋愛のはざまにおける人間の苦悩を描く装置として流行してきたことを前半部で確認した。また後半では、登場人物たちの行動（心情の動きや愛の対象選択）が何をきっかけにして生じたのかを具体的に追っていく中で、行動し、変化を続ける登場人物たちの中における、主人公の少佐の位置付けを考察した。そして『遍歴時代』における大きな主題である諦念が、この作品の中でどのように意味づけられているのかをまとめた。ライバル同士になる父子関係というモチーフは、「五十歳の男」に限らず、別のノヴェレ「さまよい歩く気のふれた女」でも描かれているし、『遍歴時代』本編の主人公ヴィルヘルムとフェーリクスにも当てはまる。これらの作品との比較を通してより広い観点からこの問題への考察を続けることも必要だろうし、また年の離れた男女間の恋愛についても『親和力』や『ファウスト』など他の作品と比較することも意義があるだろう。こうした問題については改めて論じたい。

注

- 1) ゲーテのテキストはミュンヘン版を使用し、引用は(MA, ページ数)と表記する。Goethe, Johann Wolfgang. *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Bd. 17. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u. a. München 1991.
- 2) 『遍歴時代』の成立過程については山本(2020)が詳しく論じている。ゲーテは本作に収録し

た挿話を雑誌「婦人年鑑」に1818年以降から発表し、1821年に初稿を完成するが、読者からの反応が悪かったため続編の執筆を断念する。その後初稿を解体し、物語の順番を入れ替え、内容を書き改めて1829年に決定版が成立した。このようにして書かれた本作は、いわば「アルヒーフ小説」の様相を呈し、長い中断を挟み、話し相手のエッカーマン、口述筆者のヨーハン・アウグスト・フリードリヒ・ヨーンほか多くの人物たちが関わった協働作業によって書かれたことが、膨大な広がりを持ち統一性や全体性の希薄な作品へと結実したのだという。山本賀代：「若返りと老いの物語——ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの『五十歳の男』——」，磯崎康太郎，香田芳樹編著：『晩年のスタイル 老いを書く，老いて書く』（松籟社）2020年，69-95ページ。

- 3) 『修行時代』では、主人公ヴィルヘルムがシェイクスピアの『ハムレット』を読み、翻訳し、上演する場面が描かれるが、これもまたひとつの劇中劇的な挿話と捉えることができよう。
- 4) 初期の作品に頻出する兄妹関係の原型となったのは明らかに一歳下の妹コルネーリアの存在である。ゲーテはコルネーリアとともに文学サークルに参加していたが、彼女が創作することを頑なに禁じていた。コルネーリアはのちに兄の知人でもある11歳上のゲオルク・シュロッサーと結婚するが、夫の任地での孤独な生活の中で精神を病んで、二人目の子供を産んだ直後に26歳で亡くなっている。Vgl. Damm, Sigrid: *Cornelia Goethe*. Frankfurt am Main 1992.
- 5) ミッテラウアーとジューダーの『ヨーロッパ家族社会史』では、前工業時代（ドイツ・オーストリアでは19世紀まで）においてしばしば年齢差の開いた結婚が行われていたこと、そしてその結果夫婦間のライフサイクルにずれが生じたり、相手が死別したのち再婚する男女も多かったこと、まれなことではあるが妻が夫よりずっと年上であるケースもあったことが報告されている。ここで取り上げられている具体例は農業や手工業者の世帯であるが、主に特権階級を扱うゲーテの作品でも年の離れた結婚や寡婦（夫）となる人物はしばしば登場する。たとえば『親和力』の主人公エドゥアルトとシャルロッテは、若い時にそれぞれ年の離れた相手と結婚し、死別したのちに再婚している。ミッテラウアー、ミヒャエル／ジューダー、ラインハルト（若尾祐司，若尾典子訳）：『ヨーロッパ家族社会史』（名古屋大学出版会）1993年，156ページ。また，Herwig（1997）もゲーテ作品にしばしば描かれる年の離れた結婚は，18世紀当時は女性の死亡率が高く（産褥熱やその後遺症が原因），例外的でも自然に反するものでもなかったことを指摘している。Vgl. Herwig, Henriette: *Das ewig Männliche zieht uns hinab: »Wilhelm Meisters Wanderjahre«*. Tübingen/Basel 1997, S. 198.
- 6) Koschorke, Albert: Die Textur der Neigungen. Attraktion, Verwandtschaftscode und novelistische Kombinatorik in Goethes Mann von fünfzig Jahren. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geschichte*. 73, Heft 4. 1999, S. 593.
- 7) Ebd.
- 8) Titzmann, Michael: Literarische Strukturen und kulturelles Wissen: Das Beispiel inzestuöser Situationen in der Erzählliteratur der Goethezeit und ihrer Funktionen im Denksystem der Epoche. In: Schönert, Jörg (Hrsg.): *Erzählte Kriminalität. Zur Typologie und Funktion von narrativen Darstellungen in Strafrechtspflege, Publizistik und Literatur zwischen 1770 und 1920*. Tübingen 1991, S. 229-281.
- 9) Koschorke, S. 602.
- 10) Ebd., S. 603.
- 11) 『遍歴時代』にはヴィルヘルムの息子フェーリクスが血を流す場面が三回出てくる。一度目はヘルジーリエと出会い，彼女に見惚れているうちにナイフで自分の指を傷つけてしまう場面，二

度目は落馬して負傷する場面、三回目は船を追いかけて馬とともに川に飛び込んだのちヴィルヘルムによって瀉血を施される場面である。フラヴィオはフェーリクスのパリエーションとして造形され、その瀉血はフェーリクスの流血の場面の変奏ともいえる。

- 12) Landfester, Ulrike: Unverbundenes. Die Ordnung des Blutes in, Wilhelm Meisters Wanderjahren' (1829). In: *Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts*. Hrsg. von Anne Bohnenkamp. Tübingen 2005, S. 89-123, hier S. 115-116.
- 13) Schlaffer, Hannelore: *Wilhelm Meister. Das Ende der Kunst und die Wiederkehr des Mythos*. Stuttgart 1980. S. 228.
- 14) ここでなぜマカーリエが急に登場しているのか。すでに第四章において男爵夫人が「あの人間をよく知っている女友達」マカーリエ宛に手紙を書き、ヒラーリエが兄にとって若すぎることを、未亡人が甥にとって若いとは言えないことへの不安を述べていることがわかる (MA, 424)。また、未亡人もマカーリエを「すべての悩める魂の贖罪者」として讀み、少佐もマカーリエについて、「あの優れた女性はいわば道徳的で魔法のような力をもった鏡を差し出すことで、外見的にみすばらしい姿をした不幸な人に、その純粋で美しい内面を指し示す」(MA, 454) 能力を持っていることを認めている。
- 15) このノヴェレにおける仮象の問題は、Schlaffer (1980) をはじめ多くの研究者が着目しているテーマである。登張 (1986) もまた若作りにはげむ少佐の滑稽さに着目し、老いた主人公が気の毒なくらいに若々しい自分という「仮面」を取り繕ったのちに、歯が抜けることで「内面の普遍的眞実」へと向かわざるを得なくなるという物語上の必然性を指摘している。登張正實：『ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』』(郁文堂) 1986 年、90 ページ。
- 16) Wilpert, Gero von: *Goethes Lexikon*. Stuttgart 1998, S. 272.
- 17) Herwig (1997), S. 197.
- 18) また、このノヴェレにおける中断という手法については Blessin (1996) の指摘が参考になる。「私たちはゲーテにおいて「認識」の独占はないと言った。実際このことから導かれるのは言葉への懐疑であり、それは年齢とともにより一層強く現れ、『遍歴時代』では多くの箇所に見て取れる。いくつかの場合に、この小説では読者がある一つの語を期待する地点にまで到達する。それは明快さを与えるような語、しかしもはやその語さえ発せられれば、発言されなくてもほとんど確実にになっていることが明言されるはずだと切に望まれるような一語である。この確実性を生み出す語を小説は先に延ばし、さらには全く拒絶してしまう。分量の多いノヴェレである「五十歳の男」や小説全体に続いているレナルドーの物語は、このように中断され、あるいは未完のかたちで現れる」。Blessin, Stefan: *Goethes Romane. Aufbruch in die Moderne*. Paderborn et al. 1996, S. 352.
- 19) 山本 (2020), 91 ページ。
- 20) Herwig, S. 205.
- 21) Ebd., S. 221.
- 22) Koschorke, S. 610.

要 旨

ゲーテの晩年に発表された長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829）には家族、とりわけ父子関係をめぐる問題がさまざまな挿話とともに描かれている。本稿では「五十歳の男」を取り上げ、この挿話における父子関係と小説全体のテーマである「諦念」の意味を考察する。本作では老年にさしかかった父が姪から好意を向けられ、のちに実の息子と恋のライバル関係へと変容するという、近親者間における恋愛模様が提示されるが、これは単なる逸脱的なモチーフではなく、18世紀以降における家族、結婚、法をめぐる状況の大規模な変容を背景に成立した文学的装置であることがわかる。登場人物たちによる、とりわけ愛の対象選択の行動原理は、嫉妬心、母の願望、詩や手紙、老いる身体といった媒介を通じて生起する感情によるものである点に着目し、父子関係を分析することで、少佐と息子フラーヴィオは、積極的に息子に関与する父と庇護される息子という関係ではないことが確認される。そして主人公の少佐が「諦念」に至る過程を追跡すると、少佐における「諦念」とは主体的な自己克服というよりも、周囲の状況に導かれつつ変化を受け入れる態度であり、青春の断念ではなく、老いの中に新たな生の可能性を組み込むあり方として理解できる。

キーワード：ゲーテ、ヴィルヘルム・マイスター、父子関係、老年と欲望、諦念